

釜ヶ崎の 赤いげ先生

— 本田良寛先生 —

《5》

本田良寛先生は1925年2月27日、大阪市城東区嶋野の開業医の長男として生まれた。両親ともに北陸出身で、父は開業医をしながら社会貢献事業にも熱心で母は心根の優しい人だった。

本田の「ぼくぼん」

良寛先生は自らの幼少時代を、「よちよち歩きの子どもの頃から腕白坊主で『本田のぼくぼん』と呼ばれていた。幼な友達と近くにあるトア川と化した運河で遊び、腸炎でひきつけを起し40度の発熱でも遊び呆けていた少年だった」と回想している。

地元の幼稚園を出ると、僧行社付属小学校(現在の追手門学院小学校)に入学したが、腕白坊主はエスカレートする一方だった。

34年9月21日に高知県室戸岬付近に上陸、京阪神に甚大な被害をもたらした室戸台風が大阪を襲

恩師との出会い



良寛先生が青春時代を送った府立八尾高校の正門

ったときにも、良寛少年は強い風に体をひっくりかえされながら、学校まで歩いて通った。「学校から家に帰っても勉強は全然しなかったが、子ども向きの全集本や雑誌は好きで読んで夢を膨らませていた。夏は

魚をとったり、トンボを前でタクシーにはねられ止まり落馬してしまっただけが、子ども向きの全集本を追っかけ寝屋川では雑魚や雑誌は好きで読んで夢を膨らませていた。夏は魚をとったり、トンボを前でタクシーにはねられ止まり落馬してしまっただけが、子ども向きの全集本を追っかけ寝屋川では雑魚や雑誌は好きで読んで夢を膨らませていた。夏は



本田良寛先生

落第坊主が成長

良寛先生にはこんなエピソードもある。家の近くにあって城東練兵場で、乗馬クラブの馬がたまたま鞍をつけて草を食んでいる場面に出くわし、番人がいないので乗馬に挑戦してみた。乗ってみると足を掛けるあぶみが届かなかったが、馬の背にしがみつきながら手綱をとると馬がいきなり走り出した。良寛少年は必死で鞍にしが

乗ってみると足を掛けるあぶみが届かなかったが、馬の背にしがみつきながら手綱をとると馬がいきなり走り出した。良寛少年は必死で鞍にしが

乗ってみると足を掛けるあぶみが届かなかったが、馬の背にしがみつきながら手綱をとると馬がいきなり走り出した。良寛少年は必死で鞍にしが

「落第の子とだけくらべ母も来よ」良寛少年は小学校6年のときに、布施第三小学校に転校することになった。ここで恩師の教師と出会う。この厳しい恩師に預けられ、さしもの良寛少年も「監視つきの教育のやり直しである。先生はこわかった。私は借りてきた猫のようであつた」と回想している。少年だった良寛先生は、この恩師の薫陶のおかげで秋の運動会で模擬戦の小隊長役を務まるようになった。卒業のときには、大阪府立の旧制八尾中学校(現府立八尾高校)を受けても大丈夫というところまで成長した。

1回目の落第

良寛先生は自著「にっぽん釜ヶ崎診療所」で述べている。「落第坊主の鼻たれ小僧がともかくにも、ここまでになったのは、ひ

良寛先生は自著「にっぽん釜ヶ崎診療所」で述べている。「落第坊主の鼻たれ小僧がともかくにも、ここまでになったのは、ひ

(大山勝男)